

第15回

「武蔵野・多摩の文学」

平成23年（2011）

武蔵野・多摩は、近代に入って多くの文学者たちが住み、作品を生み出した場所です。各地にはその文学を顕彰する文学館があり、それぞれがユニークな活動をしています。本講座ではこれら多摩各地の文学館をつなぎ、作家の芸術やその素顔、作品や地域との関わりなどをご紹介します。

- | | | | |
|------|-----------|---|----|
| □第1講 | 10月19日(水) | 武蔵野の文学―国木田独歩『武蔵野』、徳富蘆花『みみずのたはごと』、大岡昇平『武蔵野夫人』を中心に― | 56 |
| | | 講師 生田美秋（世田谷文学館学芸部長） | |
| □第2講 | 11月2日(水) | 仙川のくらし―武者小路実篤の芸術世界― | 58 |
| | | 講師 福島さとみ（調布市武者小路実篤記念館首席学芸員） | |
| □第3講 | 11月16日(水) | 見学会 地域の発展と町田の文学者たち&『孤愁の詩人・画家落谷虹児展』 | 60 |
| | | 講師 山端穂・神林由貴子（町田市民文学館ことばらんど学芸員） | |
| | | 会場 町田市民文学館ことばらんど | |
| □第4講 | 11月30日(水) | 山本有三と太宰治の三鷹時代 | 62 |
| | | 講師 渡辺美知代（三鷹市山本有三記念館）・吉永麻美（太宰治文学サロン） | |
| □第5講 | 12月14日(水) | 吉野の里と吉川英治 | 64 |
| | | 講師 片岡元雄（吉川英治記念館） | |
| ■ | | 福島さとみ「仙川のくらし―武者小路実篤の芸術世界」 | 66 |

定員 120名

場所 国分寺労政会館（第3講は見学会、町田市民文学館ことばらんど）

平成23年10月19日 午後1時30分～3時30分

第1講 武蔵野の文学

—国木田独歩『武蔵野』、徳富蘆花『みみずのたはごと』、大岡昇平『武蔵野夫人』を中心に—

生田 美秋（世田谷文学館学芸部長）

1、武蔵野と文学

引用①「武蔵野は私に取っては忘れられないところである。どういう意味から考えて見ても、面白い興味のあるところだと私は思う。武蔵野の風や、雨や、雪や、丘や、川や、そういうものを考えると、自然の大きさがしみじみ体に迫って来るような気がする。日本でも他にこれほど興味のある歴史を持ち、これほど変化した地形を持ち、これほど複雑したカラアを持っているところはない。」田山花袋『東京近郊一日の行楽』（現代教養文庫）10

2、国木田独歩『武蔵野』



引用②「『武蔵野の俳（おもかげ）は今纔（わづか）に入間郡に残れり』と自分は文政年間に出来た地図で見た事がある。（中略）武蔵野が今は果していかがであるか、自分は詳わしくこの問に答えて自分を満足させたいとの望を起こしたことは実に一年前の事であって、今は益々この望が大きくなって来た。（中略）秋から冬にかけての自分の見て感じた処を書いて自分の望の一少部分を果したい。先ず自分からの問に下すべき答は武蔵野の美今も昔に劣ら

ずとの一言である。」

引用③「昔の武蔵野は萱原（かやはら）のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に今の武蔵野の特色といっても宜い。則ち木は重い檜の類で冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑萌え出ずるその変化が秩父嶺（れい）以東十数里の野一斉に行われて、春夏秋冬を通じ霞に雨に月に風に霧に時雨に雪に、緑陰に紅葉に、様々の光景を呈するその妙は一寸西国地方又は東北の者には解し兼ねるのである。元来日本人はこれまで檜の類の落葉林の美を余り知らなかった様である。」

引用④「今から三年前の夏のことであった。自分は或友と市中の寓居を出でて三崎町の停車場から境まで乗り、其処で下りて北へ真直に四五丁ゆくと桜橋という小さな橋がある、それを渡ると一軒の掛茶屋がある、この茶屋の婆さんが自分に向かって「今時分、何にしに來ただア」と問うた事があった。自分は友と顔を見合わせて笑て、「散歩に來たのよ、ただ遊びにきたのだ」と答えると、婆さんも笑て、それも馬鹿にした様な笑いかたで、「桜は春咲くこと知らねえだね」と言った。」

*文学散歩

「国木田独歩の詩碑」（三鷹駅北口広場）
「桜橋」「国木田独歩文学碑」武蔵境駅から北に伸びる道路と玉川上水が交差する地点。
「玉川上水緑道」

3、徳富蘆花『みみずのたはごと』

引用⑤「彼は毎に武蔵野の住民と称している。(中略)彼の住居は、東京の西三里、玉川の東一里、甲州街道から十丁程南に入って、北多摩郡中では最も東京に近い千歳村字粕谷の南耕地と云って、昔は追剥が出たの、大蛇が出て婆が腰をぬかしたのと伝説がある徳川の御林を、明治近くに拓いたものである。林を拓いて出来た新開地だけに、いづれも古くて三十年二十年前株を分けてもらった新家の部落で、粕谷中でも一番新しく、且人家が疎らな方面である。」

引用⑥「十月は雨の月だ。雨が続いたあとでは、雑木林に茸が立つ。野ら仕事をせぬ腰の曲がった爺さんや、赤児を負ったお春つ子が、策をかかえて採りに来る。朽茸、湿地(しめじ)茸、稀に紅茸、初茸は滅多になく、多いのが油坊主と云う茸だ。一雨一雨に気は冷えて行く。田も林も日に日に色づいて行く。甘藷が掘られて、続々都へ運ばれる。」

文学散歩

「蘆花恒春園」(京王線芦花公園駅より徒歩10分)。

4、大岡昇平『武蔵野夫人』

引用⑦「中央線国分寺駅と小金井駅との中間、線路から平坦な畠中の道を二丁南へ行くと、道は突然下りとなる。「野川」と呼ばれる一つの小川の流域がそこに開けているが、流れの細い割に斜面の高いのは、これがかつて古い地質時代に関東山地から流出して、北は入間川、荒川、東は東京湾、南は現在の多摩川で限られた広い武蔵野台地を沈殿させた古代多摩川が、次第に西南に移って行った跡で、斜面はその途中作った最も古い段丘の一つだからである」

引用⑧「「はけ」とは「鼻」の訛だとか、「端」の意味だとかいう人もあるが、どうやら「はけ」はすなわち、「峽(はけ)」にほかならず、長作の家よりむしろ、その西から道に流れ出る水を遡って斜面深く喰い込んだ、一つの窪地を指すものらしい。」

文学散歩

「国分寺崖線」立川市北東部から国分寺、小金井、調布、世田谷区二子玉川にかけて伸びる段丘

「滄浪泉園」小金井市貫井南町。

「貫井神社」滄浪泉園から徒歩8分。

5、武蔵野を描いたその他の文学作品

- 1) 田山花袋『東京近郊一日の行楽』(現代教養文庫)
- 2) 若山牧水『歌集 独り歌へり』
- 3) 井伏鱒二『荻窪風土記』(新潮文庫)
- 4) 上林暁『聖ヨハネ病院にて』(新潮文庫)
- 5) 下村湖人『次郎物語』(新潮文庫)
- 6) 黒井千次『たまらん坂』(講談社文芸文庫)

むすび

引用⑨「東京の郊外は他にちょつと見られないような好い郊外だ。上方の人に言わせると、東京の郊外は、空風の強い、見る物のない、広漠としたつまらぬところのように言うけれど、それは細かい古い空気に浸って見ないためで一あるいは本当に武蔵野の丘の趣味、林の趣味、川の趣味を見ないからであって、静かにその細かい気分浸って見ると、ちょっと他の都会の持った郊外にはこれに及ぶものはないと思う。」田山花袋『東京近郊一日の行楽』(現代教養文庫)

平成23年11月2日 午後1時30分～3時30分

第2講 仙川のくらし

—武者小路実篤の芸術世界—

福島 さとみ（調布市武者小路実篤記念館首席学芸員）



（調布市武者小路実篤記念館提供）

【若き日の実篤】

- ◆雑誌『白樺』創刊
- ◆白樺美術館設立運動
- ◆新しき村の提唱

【仙川の生活と仕事】

◆仙川の家

満七十に調布の土地に新しい家が出来、その十二月二十日に僕は其処に引越した。この家では僕が何となく夢みていた三つの事が実現されて僕は喜んだ、それは僕の子供らしい夢というべきものだった。何等の根拠のないものだが、僕は満足した。

それは自分の庭には水のある事、それから古い土器が出る事、それに土筆がはえている事、之は何等の根拠のある夢ではなかったが、今度僕の住んだ庭ではこの事が偶然事実となってあらわれたのである。

僕自身はひろった事はないのだが、縄文の土器の破片はいくつも友達や孫によって

ひろわれ、土筆は自分でとって毎年たべている。

その上、この庭には三つの池がある。水のわく小さい池の他に相当大きい二つの池があり、どれも形もかわり、散歩して歩く楽しみがある。

僕としては少し贅沢な庭である。（「一人の男」第二五〇章より）

◆仙川の生活

調布に住むようになって、僕は初めて自分達の家に住んだ気がした。

二人だけで住んだので、誰にも神経をつかう必要はなかった。僕達老夫婦にとって、この事は実に自然であった。

（中略）

なんのこだわりもない、仕事の事に一心になれる生活は乱されたくない、殊に老人になっては。僕にとってはしたい仕事でいっぱいだ。

僕は正直に自分の書いておきたい事を何ものにもさまたげられずにかく事と、自分がかきたい画を誰にもたのまれずにかく、この喜びは乱されたくない。その点で僕の日常生活は僕の晩年にとっての之以上の生活はあり得ないと思っている。

しかし時々娘や孫が来ないでは困るし、又僕の生きている事を喜んでくれる人がいてくれないでも困る。（「一人の男」第二五二章より）

◆文学の仕事

僕は朝は原稿をかく事にし、午後は原稿はいっさい書かず、画をかく事にしてい

る。画は話をしながらでもかけない事はないし、隣室から話し声が聞えても、いくらか邪魔になるのは事実と思うが、それに負けない事も出来る自信もあるが、原稿の方は隣りから話し声が聞えると、どうしても精神統一の邪魔になる。それで僕は午前原稿をとりに来る人以外は面会謝絶をたてまえにしている。(中略)

文学は言葉の仕事であり、頭の仕事である。

僕は言いたい事がいくらでもあるから、書く事に不自由はしない。生きている内に言うだけの事は言っておきたいと思う。誰にたのまれたわけではないが、自分では人類にたのまれた気であるから誠にお目出たい。(「毎日の生活」・読売新聞社刊『私の美術遍歴』より)

◆画の仕事

画の仕事は僕にとっては道楽でもあり、それ以上でもある。言葉は無用の仕事の場合が多いわけだが、僕には真剣な仕事だ。

僕は元来画家には生れていないが、しかしそれだけ、自然のつくったものの美しさには感心し切る事が出来る。文句なしに美しい、生き生きしている。「生命が内に充実するものは美なり」と僕は思っている。野菜はそう言う意味で僕はいつ見ても感心する。それをさながらに心をこめてかきたい、そしてそれがかければすばらしいと思う。

殊に花などはある瞬間実に美の極致を発揮すると思う。それをすぎるといささかだれてくる。瞬間の美しさ、僕はそれを永遠化する事に画家の喜びがあると思う。心をこめて自分が本当に美しく思ったもののかく時の、敬虔の喜び、それを真心を生かしてかくと自分の生命も自ずと紙面に生き出すと思う。僕はそう言う画だけが画とは思わないが、そう言う画も真剣になってかく

だけの値打があるものと思っている。(「毎日の生活」・読売新聞社刊『私の美術遍歴』より)

僕は自分のかいた画をいくらか大事にしたいくなる。人間も九十歳近くなると、自分の仕事を愛する気持ちが入ってくる。之から少しずつ自分が好きでたまらない画をかいて見たくなる。僕も少しずつ齢をとり九十近くなると自分の仕事に愛着が出てくるようだ。

僕は自分の画を愛したくなる。静物をかくのでも、他人にあげる前に自分が楽しみたくなる。本当に自分が愛される画をしみじみかきたいと思う。(「自分の画(二)」・読売新聞社刊『私の美術遍歴』より)

◆愛蔵品に囲まれて

僕は画の本物を見ると、それをかいた時の画家の最美の心にふれる事が出来、同時にその画家をそれをかいた事実そのものにふれる事が出来る。勿論彼等も人間だ。人間以上ではない。だが全精神を生かせるだけ生かした。その真の証しにふれる。その画家の真心にふれる喜び。それが本当の画の喜びと思う。

古今東西の芸術家の真の作品にふれる事で僕は古今東西の人間の心をじかに感じる事が出来、人間は自分一人だけが孤立しているものではなく、人類共通なものに導かれている事を知る。美を愛する深さこそ、我等を導くものの深さと思える。人間は孤立したものではないのである。我等は無限なものから生れたものであり、無限な美を限りなく愛するものである。(「好き者の独語」・読売新聞社刊『私の美術遍歴』より)

平成23年11月16日 午後1時～4時

第3講 見学会 地域の発展と町田の文学者たち& 『孤愁の詩人・画家落谷虹児展』

山端 穂・神林 由貴子（町田市民文学館ことばらんど学芸員）

○はじめに

- ・地域社会は文学者にどんな影響を与えるのか
- ・文学者たちの求めた環境と町田市域の歴史的特徴

町田ゆかりの文学者たちとその歴史的特徴

①文化的発展の基礎を蓄積した江戸時代

○江戸時代の町田市域

江戸から比較的近い地域（首都圏）に市域が存在していたため、江戸の先進的な文化や情報の影響を強く受ける。

五十嵐浜藻、小山田与清、小島家の人々（小島正敏、小島正則、小島為政、小島守政）

②明治・大正から昭和初期まで

○明治・大正の町田市域

自由民権運動の隆盛と衰退→人的交流の活発化。民権青年グループの東京進出など
北村透谷

◇鉄道の開通とその影響

○町田市域周辺の鉄道

明治5年 東海道線が開通

明治22年 東海道線（新橋―神戸）が全線開通、甲武鉄道（新宿―八王子）が開通→町田市域近郊を通る鉄道の開通によ

り、市域の交通事情にも変化が。特に八王子に近い地域（相原・小山地域など）にはより多くの物資や情報がもたらされる。

○横浜線の開通

明治41年 横浜鉄道（八王子―東神奈川）開通→八王子・横浜方面から物資が流入、駅周辺地域の発展。

八木重吉や、中村雨紅はこうした周辺環境の変化を目の当たりにした。横浜方面から文学者が流入 ex.田山花袋、小島烏水、大町桂月

「小山田紅潮社」旗揚げ等の文芸運動

○小田急線の開通

昭和2年 小田急線開通。市域を鉄道が縦横に走ると共に、都心への交通手段が十分に整備。その衝撃は横浜線開通の比ではなかった。他の地域から文学者たちが町田市域移住

ex.和田傳、桜田常久、下村照路

市域生まれの文学者の活躍

ex.川田総七

○戦時下における疎開地として

太平洋戦争のさなか、鶴川周辺が文学者の疎開先へ

○戦時下の文学空間を彩った文学者たち

白洲正子、河上徹太郎、石川桂郎、神近市子、今井邦子、神部照子、井上友一郎

③戦後の経済成長・首都圏拡大の中で

○文学者の職場として

宮川哲夫、乾直恵

○都市化の進行と町田市の誕生

昭和33年2月1日 町田市が誕生

○自然あふれる住環境を求めて

「首都圏整備法」「市街地再開発プラン」
の適用→住宅地の増加と大型団地の形成。
ライフライン・道路網の整備。

遠藤周作、木本正次

○団地で暮らす文学者たち

大型団地の進出—町田で団地暮らしを
する文学者の出現

ex.半田義之、八木義徳、藪田義雄

○急激な都市化の中で

都市化の進行と近郊農村の荒廃→農民文

学の主要なテーマのひとつへ

ex.薄井清

④文学者を惹きつける新たな町田の魅力とは？

○都市化における新たな魅力の創出

駅前的大型商店街が文学者を刺激する新
たな魅力へ

福本和也、日影丈吉、三浦しをん

○現在の町田と文学

自然豊かな創作の場としての魅力。

ベッドタウンとして居を求めた次世代
(町田生まれ)の文学者の活躍

繁華街として新たな魅力を加えた町田が
小説の舞台として見直されつつある。



路谷虹児展、チラシ



路谷虹児展、解説風景



講座風景

平成23年11月30日 午後1時30分～3時30分

第4講 山本有三と太宰治の三鷹時代

渡辺 美知代（三鷹市山本有三記念館）、吉永 麻美（太宰治文学サロン）

【山本有三の三鷹時代】

1. はじめに

＊三鷹の概要

＊三鷹の歩みとゆかりの作家

2. 山本有三と三鷹

＊山本有三

＊有三と三鷹の家

「三鷹の思い出」

私が三鷹村に越したのは、二・二六事件の直後であった。その翌年に日支事変がおこり、その三年後に、三鷹は町になった。

太平洋戦争も、敗戦も三鷹の家で迎えた。そういう意味で、三鷹は思い出の深い土地である。私はここで、「新編路傍の石」を書き、「戦争とふたりの婦人」を書き、「米百俵」を書いた。新かなづかい、当用漢字の制定、新憲法の口語化にたずさわったのも、この時代のことである。

しかし、敗戦の結果、私は家を接収され、なつかしい三鷹を立ちのかなければならないことになった。私はしばらく他人の家に間借りをしたり、大森に移ったりして、今では神奈川県に住んでいる。三鷹が市に昇格したのは、その間のことである。ことしは、その十五周年にあたるというが、もし、家を接収されなかったら、私も市民として三鷹にとどまっていたことであろう。

三鷹に住んでいたのは十一年ほどだが、

三鷹は私にとって忘れがたい土地である。

初出：「三鷹市報」昭和44年11月3日号

出典：『山本有三全集』第11巻 新潮社 1977年

3. 山本有三の三鷹時代

＊三鷹時代の作品

長編小説：「路傍の石」（「朝日新聞」1937年1月～6月）「新篇 路傍の石」（「主婦之友」1938年11月～1940年7月）

中編小説：「はにかみやのクララ」（「主婦之友」1937年1月～3月）「ストウ夫人」（「主婦之友」1938年1月～3月）

戯曲：「米百俵」（「主婦之友」1943年1月～2月）

その他：児童教養叢書『日本少国民文庫』全16巻 新潮社 1935～1937年

＊「ミタカ少国民文庫」の活動

＊国語問題への取り組み

＊山本邸の接収

＊まとめ

4. 三鷹市山本有三記念館について

＊建物の歴史

＊三鷹市山本有三記念館の特徴

【太宰治の三鷹時代】

1. 三鷹へ

昭和13年1月石原美知子と見合い、11月

に婚約。翌年1月に井伏鱒二宅で祝言。甲府での新婚生活を経て、昭和14年9月東京府北多摩郡三鷹村下連雀に転居。

三鷹について一つの作品にまとめることはなかったが、主人公の住まいや物語の舞台にとりあげるなどして、当時の三鷹を彷彿する数多くの情景を作中に残している。

2. 太宰の住まい

三鷹市下連雀113（現：下連雀2-14-7）の新築借家。家賃24円。3軒並びの一番奥。12坪半ほどの敷地で6畳、4畳半、3畳の間取りで玄関、縁側、風呂場があった。6畳を書斎にしていた。執筆は日中（午後三時前後まで）。1日5枚が自分の限界。

3. 中期の旺盛な活動期（昭和13年～昭和20年）

昭和12年10月「若草」に発表した「燈籠」から1年間のスランプを経て、中期の旺盛な活動期に入る。所帯を持ち、精神的安定を取り戻し作風も明るくなる。例：「富嶽百景」（昭和14年）、「走れメロス」（昭和15年）、「東京八景」（昭和16年）など。

4. 後期の太宰文学（昭和21年頃～）

昭和22年11月14日。疎開先の故郷青森県北津軽郡金木村（現：五所川原市金木）から三鷹の家に戻る。第二次世界大戦が終結してから亡くなる昭和23年（1948）6月までの3年足らずの間に自宅が被災、体調を崩すなどしながらも、精力的に執筆に取り組んでいる。

◆破滅の文学、絶望期→罪を描く

◇家庭を主題とした作品を多く残す。一貫

して女性の強さを追究する姿勢

5. 太宰治 三鷹での足跡

仕事部屋

その他

店は主に編集者との打合せ場所に使用

①うなぎ「若松屋」②小料理屋「千草」

③伊勢元酒店 ④美登里鮨

⑤禅林寺 ⑥跨線橋 ⑦玉川上水

6. 終焉の地・三鷹

□作家生命（＝太宰治）を費やした地…生涯で残した作品の大半を三鷹で執筆。

□肉体（＝津島修治）が没した地…一箇所に定住することのなかった太宰が家族との所帯持ち、終の棲家とした。

まさに三鷹は、太宰にとって終焉の地というだけでなく創作活動の地である。

7. “太宰治”を演じた津島修治

□写真 無頼派のイメージ

□回想録など→当時の証言のもとに形成される太宰の人物像

太宰との関係性によって食い違う論

津島美知子著『回想の太宰治』（講談社刊）

→太宰の人となり、作品創作過程を知る上で重要な研究書

<三鷹時代の肖像>

戦後、太宰が「斜陽」でベストセラー作家となり、坂口安吾、織田作之助らと共に無頼派の象徴的存在となってからのもの。撮影したのは写真家では林忠彦と田村茂の二人だけ。参考文献：林忠彦著『文士の時代』（朝日新聞社刊）

平成23年12月14日 午後1時30分～3時30分

第5講 吉野の里と吉川英治

片岡 元雄（吉川英治記念館）

1) 吉川英治の生涯

- ・ 地方、農村との直接的関係の薄さ
- ・ 文学の社会に与える力への確信
- ・ 頻繁な転居

作家となって以後の住所

本郷千駄木町（番地不明）（大正12～13年）

東京府豊多摩郡杉並村高円寺1016（大正13～15年）

東京府豊多摩郡杉並町馬橋547（大正15～昭和3年）

東京府豊多摩郡落合村大字上落合553（昭和4～6年）

東京市芝区芝公園14号地（昭和6～10年）

東京市赤坂区表町3-24（昭和10～19年）

東京都西多摩郡吉野村上柚木（昭和19～28年）

東京都品川区北品川4-740（昭和28～32年）

東京都渋谷区松濤83（昭和32～33年）

東京都港区赤坂新坂町1（昭和33～37年）

2) 地方・農村への関心と日本青年文化協会

- ・ 倉田百三、白鳥省吾、安岡正篤との交流

- ・ 日本青年文化協会

会長：吉川英治

機関誌：『青年太陽』（昭和10年1月号～12年5月号）

- ・ 「旧藩主帰郷論——地方文化振興の適任者として——」「再び、旧藩主の文化的帰郷に就て」（「草思堂雑稿」富士出版社 昭和16年9月20日）

- ・ 未発表原稿「中央農産館ノ構想」

3) 吉野村移住への思い

- ・ 教育

梅花賞

学校への図書の寄贈、図書館の整備

- ・ 文化活動

公民館建設

俳句会

- ・ 観光振興

秩父多摩甲斐国立公園（元秩父多摩国立公園）

桜の植樹

- ・ 村を離れて

「半野軒」

「市生山心」

「吉野の里と吉川英治」関連年譜

明治 25 年 8 月 11 日	現在の横浜市内で生まれる。
昭和 8 年 5 ～ 6 月頃	平野零児・浜本浩・中野実・永井龍男・北林透馬・三角寛・小島健三らと五日市・青梅旅行。五日市で一泊し、翌日徒歩で山を越えて青梅へ。
昭和 11 年 11 月 15 日	日本青年文化協会東京府増戸村（現あきる野市）支部大会出席。大悲願寺にて講習。増戸村小学校にて講演会。
昭和 16 年 2 月	西多摩郡吉野村柚木の旧野村邸を購入。
昭和 18 年 1 月 13 日	吉野村の米英撃滅必勝村民大会で講演。演題は「ご奉公の道」。
昭和 19 年 3 月	東京・赤坂表町から吉野村柚木に転居。
昭和 19 年 4 月	転居してまもなく急性肺炎で床に伏せる。
昭和 20 年 3 月 10 日	東京大空襲で養女園子を失う。
昭和 20 年 4 月 2 日	柚木の屋敷の裏山に米軍の B 2 9 が墜落する。
昭和 20 年 8 月 15 日	終戦を機に創作の筆を絶つ。
昭和 20 年 9 月 3 日	吉野村疎開児童へ講演。演題「平和のお家へ帰ったら」。
昭和 20 年 9 ～ 10 月	戦中の疲労から文子夫人が体調を崩し、床につく。
昭和 20 年 11 月 3 日	G H Q 将校の訪問を受ける。
昭和 21 年 3 月 10 日	青梅警察署で講演。演題は「文学の使命」。
昭和 21 年 9 月	社団法人大多摩観光施設協会（現・大多摩観光連盟）設立。吉川英治も川合玉堂とともに創設に関わった。《大多摩》とは、会の命名にあたって吉川英治が造語したもの。
昭和 21 年 10 月	秩父多摩国立公園（現・秩父多摩甲斐国立公園）の指定の準備のための青梅・奥多摩踏査に参加。この後、昭和 25 年 7 月に国立公園に指定された。
昭和 22 年 3 月	菊池寛の勧めで小説の執筆を再開し、戦後初の新作小説（雑誌『東京』4 月号掲載の「人間山水図巻」）を発表する。
昭和 22 年 5 月	万年橋碑建立。撰文・吉川英治、書・尾上柴舟、題字・川合玉堂による。
昭和 24 年～25 年	吉野中学校の卒業生を自宅に招き、講話。
昭和 24 年 10 月 18 日	吉野公民館開館。
昭和 25 年 1 月	『小説公園』に「平の将門」の連載を開始（～昭和 27 年）。
昭和 25 年 3 月	『週刊朝日』に「新・平家物語」の連載を開始（～昭和 32 年）。
昭和 25 年 6 月 15 日	次女・香屋子誕生。
昭和 26 年 2 月 25 日	吉野公民館で、勤労感謝祭を開催。吉川英治の呼びかけで徳川夢声・赤坂小梅・宮田重雄らがこのために来村する。
昭和 28 年 7 月 24 日	吉野村から品川区御殿山に転居することとなり、村民を招いてお別れパーティーを開催する。
昭和 30 年	吉野村が青梅市に編入される（青梅市成立は昭和 26 年）。
昭和 37 年 9 月 7 日	吉川英治死去。
昭和 37 年 9 月	青梅市から名誉市民の称号を贈られる。
昭和 52 年 3 月 23 日	柚木町の吉川邸の一画に吉川英治記念館が開館する。

仙川のくらし―武者小路実篤の芸術世界

福島さとみ（一般財団法人調布市武者小路実篤記念館）

調布市武者小路実篤記念館は、昭和51年に90歳で亡くなった武者小路実篤のご遺族より調布市に邸宅と愛蔵の美術品・愛用品等を寄贈いただき、その後、邸宅は昭和53年に実篤公園として開園、昭和60年、隣接地に開館しました。多摩地域にある文学館として、多摩の歴史講座「武蔵野・多摩の文学」の講座に招かれ、当日は実篤の主な活動、素顔の実篤、そして、仙川の地を選び、そこでの日々を中心にお話しました。

実篤は明治43年、学習院時代の文学仲間たちと創刊した雑誌『白樺』で文壇に登場して以後、ロングセラーの「友情」「愛と死」「真理先生」のほか「人生論」など生涯七千篇といわれる作品を執筆しました。また、『白樺』は誌上や主宰展覧会で当時まだ珍しかった西洋近代美術のゴッホ、セザンヌ等を広く紹介し、その後の文学や美術に大きな影響を与えています。文学以外でも大正7年に人間らしく生きる社会を目指し設立した「新しき村」の活動や、40歳頃からは自身で絵筆をとり、人々に親しまれている野菜や花などの画に詩や言葉を添えた数々の作品を描きました。

幅広い活動をした実篤について、多くの方々は文壇の重鎮、謹厳実直など固いイメージをお持ちです。そんな実篤の素顔は、子どもの頃には身体が弱く、生死を身にもって感じ、生命力の不思議さや生き抜く力を信じ創作してきました。そして、三人の娘たちが生まれ、昭和20年代には一緒に住む孫たち等家族にとり、実篤はユーモア溢れ、常に「面白い」存在でした。父、祖父として、子どもの気持ちを尊重し、何事にも前向きに取り組み、自分らしくいられることに心を寄せています。

実篤が70歳、昭和30年に仕事の集大成の場として選んだのが調布市の「仙川の家」で、ここに20年間暮らしました。年をとったら「水のあるところに住みたい」との願いを叶え、国分寺崖線の湧水を水源として大小の池があり、緑が多く残る地です。安子夫人との二人の生活で、朝に原稿を書き、午後からは画を描き、来客の応対が日課でした。

平均寿命がまだ60歳代の頃に、70にして家を建て、多くの作品を生み出した実篤。彼にとり仙川の生活は、明日には良い作品がかかるという前向きな姿勢を持ち創作に取り組み、老いても生き生きと暮らす様子がうかがえます。そこには、実篤が書いた「老いとは悲観ではなく、経験を積み重ね、ますます賢くなることを意味し、その賢さが人間の信頼や尊敬につながっている。」を実践しています。自分らしく生きることを大切に考えてきた実篤のこうした姿勢は、世代、時代を超えても学べべきことは多いことを講座のまとめにかえてお話しました。

参加者の方々は熱心に聞いて下さった事を記憶しております。多摩地域の文化への関心を高めてゆくには、今後もこうした地域の文化事業を続けていただくように願っております。当館も微力ながら協力させていただき、情報発信の機会として参りたいと思います。